HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ザスーリチの手紙への回答』およびそれの『下書き』考
Author(s)	佐藤, 正人
Citation	北海道大學　經濟學研究, 22(4), 207-246
Issue Date	1973-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31253
Type	bulletin (article)
File Information	22(4)_P207-246.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『ザスーリチの手紙への回答』および それの『下書き』考

佐　藤　正　人

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　『下書き』と『手紙』の内容
Ⅲ　『手紙』をめぐって
　1.　『手紙』簡略化の理由
　2.　『手紙』を受けとった側
　3.　ペテルブルク委員会
Ⅳ　ロシア共同体の歴史的位置
　1.　当時の論争
　2.　マルクスとミール共同体
　3.　現在の研究水準からみて
Ⅴ　小　　括

Ⅰ　はじめに

マルクスの『1881年3月8日付けヴェラ・ザスーリチへの手紙』[1)]（以下『手紙』と略）および『ヴェラ・ザスーリチの手紙への回答の下書き』[2)]（以下『下書き』と略）は，その内容の重要性や公表経過の異様性などから，さまざまな分野から大きな注目を集めてきた。

この『手紙』は1881年に書かれ，発見されたのは1923年，公表されたのは1924年『革命運動資料』誌上においてであった。また，『下書き』は1911年にリヤザノフによって発見され，『手紙』と『ザスーリチからマルクスへの手紙』を付けて『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』に1926年に公表された。[3)]

我が国においては，『アルヒーフ』の出版された1926年に早くも『アルヒ

ーフ』の翻訳という形で，山村喬氏により『社会思想』誌上に，2回にわたって紹介され[4]，1927年にはリヤザノフのはしがきを付けて『ロシア農村共同体の研究』として出版された[5]。また，1931年には改造社版の『マルクス・エンゲルス全集』第21巻に，やはり『アルヒーフ』からの翻訳で，それら一連の文書が収録されている[6]。「マルクスがロシアの農村共同体を如何に見ていたかは，すこぶる興味ある問題である。……草稿のままではあるが，村落共有制の発達に関するマルクス及びエンゲルスの見解を研究するのに非常に興味ある資料たること，またマルクスの研究方法をうかがうに価値ある資料なること[7]」という山村氏の前書きや，改造社版『マルクス・エンゲルス全集』の「解説[8]」，山村訳『ロシア農村共同体の研究』を参考にして書かれた，嘉治隆一氏の「ロシア経済史[9]」などから，マルクスの『手紙』が戦前から我が国においても注目を集めていたことがうかがえる。

戦後において，『手紙』はますます大きな注目をあつめた。

まず第1に『手紙』は，アジア的生産様式論争の復活の中で脚光を浴びた。この論争は，何よりもまず「アジア・アフリカ・ラテンアメリカの民族解放運動の評価，戦後の世界社会主義革命のあり方と関連して再開された[10]」のであるが，アジア的生産様式の世界史的位置づけをめぐって特に論点が集中した。ある者は，アジア的生産様式は原始共同体に他ならないと主張し[11]，ある者は原始共同体から階級社会の過渡期であると主張し[12]，またある者は奴隷制的生産様式に先立つ独自の社会構成体であると主張した[13]。最近の有力な見解として多系列的発展の中で地理的要因を重視しながらアジア的生産様式を位置づけようとする者も出てきた[14]。また，『経済学批判』の序言にある，いわゆる唯物史観の定式化と，『手紙』とはいかなる関係にあるのか，また『諸形態』と『手紙』とはどのように異なっているのか，また同じなのか[15]，など論争も複雑・多岐なものとなっている。しかし，いずれも，『手紙』をそれぞれ独自に解釈しながら『手紙』を自己の主張の論拠にしているという事実を，我々は確認しうるだろう。

第2に『手紙』は，後進国における「非資本主義的発展の道」の理論づけ

として注目されてきた。この問題は，第2次大戦後に政治的独立を達成したアジア・アフリカ諸国が資本主義的発展の道を通らずに社会主義へ移行しうるかどうか，という極めて実践的な課題を担って論議されているが，多くの論者はマルクスが『手紙』において非資本主義的発展の道の可能性を論じていたことを認めている[16]。この場合，非資本主義的発展の道の条件をマルクスはどうとらえていたのか，また現段階において非資本主義的発展の道を経て社会主義に移行する際，プロレタリアートの独裁なくしても可能なのかどうか，移行の際の国際的条件は何なのか，など移行条件が論争点になっている[17]。

第3に，ロシア社会論，ロシア革命論をめぐって『手紙』の内容が検討されている。マルクスは，ロシアが資本主義的発展の道をたどることなしに社会主義への移行が理論的にだけでなく実際にも可能だと考えていた点で，ナロードニキと同意見であったとする者[18]と，そうではなくナロードニキを政治的に支持していたが，科学的認識としては，ナロードニキ的ロシア革命は困難だと見ていた，とする者[19]。また，マルクスとエンゲルスのロシア観・ロシア像には微妙な差異があり，マルクスは共同体の社会的再生を強調し，エンゲルスは共同体の崩壊はロシアにおいても不可避だということを強調しがちであったこと[20]，更に，ロシア共同体の非資本主義的発展の条件を，エンゲルスは外からの衝撃に，マルクスは内部からの変革に求める傾向があったことなどを主張する者[21]。反対に，マルクスとエンゲルスとの間に，基本的な点については差異がなかったと主張する者[22]，など『手紙』の理解をめぐって意見が分かれている。

以上述べた他にも，『手紙』はマルクスの世界史像・後進国革命像の転機となったとする者[23]，資本の本源的蓄積の特殊な型，資本主義発展の上からの道を『手紙』から読みとろうとする者[24]，『手紙』の射程距離を，1917年のロシア革命以後の農業・農民問題にまで延ばそうとする者[25]，などがいる。

だが，このように広汎な議論の対象にあげられながら，『手紙』自体に対するテキスト・クリティークはほとんどなされてこなかった。マルクスの書

いたものに間違いがあろうはずがないというドグマがここでも支配的であった。そして多くの人は『手紙』と『下書き』とを同一視してきた。しかし，あのように広範囲で複雑な問題を扱った4つの草稿が（しかも，第4草稿を除いては，かなり長いものである）なぜあのように簡単な抽象的内容の『手紙』に結実していったのか。『下書き』で検討されながら，『手紙』では省かれてしまったさまざまな命題は，マルクスの考えだとしてよいのだろうか。それとも，マルクスは，疑問を感じて自ら抹殺してしまったのだろうか。政治的配慮から省略しただけなのだろうか。

この論文は，『手紙』と『下書き』との関係に焦点を合わせながら，『下書き』の意義と限界を明らかにすることを課題としている。その際，マルクスとロシアの同時代人との手紙のやりとり，マルクスの残したロシアについての厖大なノート類，当時のロシア共同体についての論争などから，この課題に接近するという方法をとっているが，現在のソビエト歴史学の成果から見て『下書き』の内容（特に共同体論）は科学的批判に耐えうるものなのかどうかという点にも注意を払った。

1) *Marx an Zasulič*,《Marx-Engels Archiv》,（以下《Archiv》と略）Bd. Ⅰ, Frankfurt a. M., SS. 341-2.『マルクス・エンゲルス全集』大月書店版（以下『全集』と略）19巻238-9ページ。なお《Archiv》第Ⅰ巻の発刊がいつなのかは第Ⅰ巻には書かれていない。林直道氏は1924年と記している（林直道「ヴェラ・ザスーリチのマルクスへの手紙」『経済学雑誌』第67巻第1号38ページ）。しかし，《Archiv》Bd. Ⅱ（Frankfurt a. M., 1927）の後についている第Ⅰ巻目の宣伝文には「1926年夏に出版」とあることから1926年に発刊されたと思われる。
2) *Die Konzepte*,《Archiv》Bd. Ⅰ, SS. 318-340,『全集』第19巻386-409ページ。
3) こうした経過については，淡路憲治『マルクスの後進国革命像』（1971年未来社）273-4ページ，平田清明「歴史的必然と歴史的選択」，『展望』1971年10月号，40-1ページなどを参照。また，リヤザノフはマルクスの草稿を解読する際ブハーリンの助けを借りているが，レーヴィは，ここでブハーリンがマルクスのロシア論を知ったことが，ブハーリンの農民観を決定づけたと指摘している（A. G. Löwy, *Die Weltgeschite ist das Weltgericht*, Wien 1969, SS. 224-5）。
4) 「マルクスよりザスリッチへの手紙」『社会思想』第5巻10-11号。
5) 山村喬訳『ロシア農村共同体の研究』（1927年同人社）。

6) 伊藤好道，萩原厚生訳，『マルクス・エンゲルス全集』改造社版第21巻，397-427ページ。以上のことから，淡路憲治氏が，「1881年のマルクスのザスーリッチあての手紙およびその草稿のわが国における最初の翻訳者である氏（平田清明氏のこと—引用者）」（「ロシア論におけるマルクスとエンゲルス」『経済研究』第23巻第3号，224ページ）と書いているのは完全な間違いである。

7) 「マルクスよりザスリッチへの手紙」『社会思想』第5巻10号38ページ。ただし引用文は現代かなづかいに直してある。

8) 「マルクス・エンゲルス全集」改造社版第21巻439ページ。

9) 嘉治隆一「ロシア経済史」『経済学全集』改造社版第29巻655ページなど。

10) 塩沢君夫『アジア的生産様式論』（1970年御茶の水書房）はしがき。

11) たとえば，原秀三郎「アジア的生産様式論批判序説」『歴史評論』No. 228，14ページ，林直道「アジア的生産様式の概念について」『歴史評論』No. 266，59ページ。

12) たとえば，小林良正『アジア的生産様式研究』（1970年大月書店）149ページ。

13) 塩沢君夫，前掲書，187ページなど。

14) 福富正実『共同体論争と所有の原理』（1970年未来社）第5章など。

15) 望月清司「『諸形態』と『農村共同体』に関する覚え書」『社会科学年報』第1号，藤原浩「『ゲルマン的共同体』とはなにか」『思想』No. 391，福富正実「再開されたアジア的生産様式論争の経過と若干の問題点について」『アジア的生産様式論争の復活』（1969年未来社）など。なお，我が国におけるアジア的生産様式論争の詳細については，塩沢君夫氏の『アジア的生産様式論』第1章，また国際的論争については，福富正実編訳『アジア的生産様式論争の復活』をとりあえず参照。

16) 『手紙』が非資本主義的発展の道を論じているかどうか，ということに直接言及していないが，赤羽裕氏は，非資本主義的発展の道を否定し，「近代化」の前提となるのは共同体的土地所有の解体→商品交換に媒介された新しい社会的分業圏の形成，以外にないとされている（赤羽裕『低開発経済分析序説』1971年岩波書店，255-262ページ）。しかし赤羽氏以外のほとんどの論者は非資本主義的発展の道を認めているようである。

17) たとえば福富正実，前掲書，第2章「共同体理論と非資本主義的発展の道」，本田健吉『低開発経済論の構造』（1970年新評論），尾崎彦朔編著『低開発国政治経済論』（1968年ミネルヴァ書房），丹羽克治「低開発国の経済発展と国家資本主義」『立教経済学研究』Vol. 24，No. 2，3，4，Vol. 25，No. 2など。本田氏や尾崎氏は，プロ独裁なくしても国家資本主義を媒介として，もしくは半社会主義的な民族民主国家を媒介として，社会主義へ移行しうるとしている。丹羽氏は，プロ独裁なくして非資本主義的発展の道は不可能であると，主張している。

また，国際的条件としては，社会主義体制の成立が一般に強調されている。

18) 田中真晴『ロシア経済思想史の研究』（1967年ミネルヴァ書房）15ページ，平田清明，前掲論文，10月号52ページなど。

19) 竹内芳郎「政治的選択と≪客観的可能性≫」『展望』1972年2月号170-1ページ。

20) 淡路憲治，前掲論文，227ページ。

21) 田中真晴，前掲書，15ページ，水田洋『講座マルクス主義』3（1970年日本評論社）35ページ，淡路憲治，前掲書，第8章など。

22) 福富正実，前掲書，80-1ページ。

23) 淡路憲治，前掲書，第7章，第8章。

24) 山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』（1969年未来社）第8章，海野福寿「日本型原蓄論」『講座日本史』5，（1970年東京大学出版会）など。

25) 保田孝一『ロシア革命とミール共同体』（1971年御茶の水書房）。

Ⅱ　『下書き』と『手紙』の内容

『下書き』と『手紙』はどのような内容をもっているのか。また『下書き』の4つの草稿と『手紙』とは，どこがどう違っているのか。マルクスの真意を再構成するためには，マルクスの思考の跡を追うことからはじめなければならない。その場合，『下書き』と『手紙』は，明らかにザスーリチからの手紙に対する回答として書かれたものであり，その手紙によって多かれ少なかれ一定のわく組みを与えられたことを考慮するならば，[1]『ヴェラ・ザスーリチからマルクスへの手紙』の内容の検討が不可欠な作業となろう。

1　『ザスーリチからマルクスへの手紙』[2]

この手紙は1881年2月16日にザスーリチからマルクスに宛てて出されたものである。その内容は，『資本論』がロシアで人気を集めており，『資本論』がロシアの運命について与えている解答をめぐって2つの解釈があること，そのどちらがマルクス自身の考えなのかを明らかにして欲しい，というものであった。一方の主張は「マルクス主義者」であるという自称のもとで，農村共同体は死滅する運命にあり，社会主義者は都市労働者のもとで宣伝活動をもっぱら行なうべきだというもので，他方の主張は，『資本論』は農業問

題もロシアのことも論じてはいないが，農村共同体は社会主義的軌道の中で発展でき，革命的社会主義者は共同体の解放とその発展のために全力を捧げるべきだ，というものであった。そして「わが農村共同体のありうべき運命についての，また世界のすべての国が資本主義的生産のすべての段階を通過することが歴史的必然であるという理論についての，あなたの考えを述べて[3]」欲しい，とザスーリチは問題を提起した。

2　第1草稿

第1草稿は，他の草稿に比べて最も長文であり，マルクスによって5つの節に分けられている。

第1節は，『資本論』の原始的蓄積論がロシアに適用できないこと，つまり，ザスーリチの述べているどちらの側の主張を支持する結論も，『資本論』からは引き出せない，と述べている。第2節は，ザスーリチの提起した≪歴史的必然の理論≫，つまり共同体滅亡の歴史的宿命性，に対する≪純粋に理論的な見地[4]≫からの一般的な批判にあてられている。マルクスは，古ゲルマンの共同体などを例にとり，農耕共同体の歴史的位置とその構造上の形態を分析し，「『農耕共同体』にふくまれる私的所有の要素が集団的要素に打ち勝つか，それとも後者が前者に打ち勝つか。すべてはそれがおかれているこの歴史的環境に依存するのである[5]」とし，歴史的環境として，西ヨーロッパ資本主義との同時存在と資本主義制度の危機をあげて，ロシアの農耕共同体が集団的生産の要素として発展しうる≪理論的可能性[6]≫を述べた。第3節は，第2節が一般論として述べられていたのに対し，ロシアの共同体に即し，農耕共同体を苦しめている全ての悲惨事を度外視して，「この共同体の構造上の形態とその歴史的環境との双方がこの共同体に許容している今後の発展の能力のみを考察[7]」している。この節は，第2節と重複する内容が多いが，より具体化され，ロシア共同体にとって有利な条件として，共同所有が全国的な規模で維持されていること，集団的農業を共有の草地で実行していること，地勢が機械制耕作をうながしていること，農民がアルテリ

契約に慣れていることなどがあげられ，他方不利な条件として，共同体の孤立性・局地的小宇宙性があげられている。そして，第2節で述べられた≪理論的可能性≫が現実性に転化するためには，≪このような転化の経済的必要と，この軟化を遂行するための物質的諸条件[8)]≫が必要だとして，その両方の条件が存在しているとしている。第4節は，≪理論から現実に降り[9)]≫，ロシアの共同体は農奴解放以来，国家にさいなみつづけられ，苛斂誅求によって疲弊させられたこと，さらに，国家は共同体の血をすする資本主義的寄生虫を富ませることに協力したことが分析されている。第5節は，第4節で分析された共同体を維持・利用しながら搾取を続けるというやり方が時代おくれになりつつあり，「共同所有を廃止し，農民のうちで多少とも生活のゆとりのある少数者を農村の中間階級に仕立てあげ，そして大多数の農民をただのプロレタリアに転化する[10)]」時期が近いこと，共同体の老朽は歴史的宿命ではなく人為的なものであること，したがって「ロシアの共同体を救うには一つのロシア革命が必要である[11)]」こと，そうすれば共同体はロシア社会を再生させる要素として発展すること，が主張されている。

3　第2草稿

第2草稿も，やはり5つの節に分けられている。第1節は，第1草稿の第1節とほぼ同じである。第2節は，ザスーリチの書いてきた，ロシアのマルクス主義者について，マルクスは知らないと述べている。第3節は，第1草稿の第2節の前半とほぼ同じで，≪歴史的必然の理論≫を批判し，西ヨーロッパ資本主義との同時存在という歴史的環境を述べて，共同体発展の理論的可能性を述べている。第4節は，第1草稿第3節に述べられたことがコンパクトにまとめられている。第5節は，第1草稿第4節，第5節で分析されたロシアの現実の事態が簡単に述べられ，「国家の苛斂誅求によって打ちひしがれ，商業によって略奪され，地主によって搾取され，高利によって内部から掘りくずされた共同体が，どうしてこれ（共同体を押しつぶすこと――引用者）に抵抗できるであろう？[12)]」と，ロシア革命への展望が打ち出されない

ままに終っている。このように第2草稿は，第1草稿に比べ，農耕共同体の一般的歴史的位置づけが省略され，ロシアの現状分析が非常に簡単に片づけられ，ロシア革命への展望が悲観的である，などの特徴が見い出せる。

4　第3草稿

第3草稿は，短い前書きと2つの節から成っており，しかもその最後の終り方から見て，途中で中断されたものである。第1節は，第1草稿第1節と同じく，『資本論』からは賛否いずれの論拠も引き出せないことが述べられている。第2節は，第1草稿第2節と第3節にあたる部分が述べられており，しかも第1草稿で重複していたことが整理しなおされている。第1草稿では≪歴史的必然の理論≫への反論として，まず資本主義との同時存在という歴史的環境の違いを強調したのに対し，この草稿では農耕共同体の歴史的位置とこの構造に固有な≪二重性≫の分析からはじめられ，一般論として第1草稿第2節と同様に「私的所有の要素が集団的要素に打ち勝つか，それとも後者が前者に打ち勝つか。すべては，それがおかれている歴史的環境に依存する[13]」とした。そして一般論を離れて，ロシアの共同体を苦しめている悲惨事を度外視して，「ロシアの共同体の構造上の形態とその歴史的環境とがそれに与えている発展の可能性[14]」を分析し，資本主義との同時存在という歴史的環境と農村生活に支配的な土地の共同所有の存在とが結びつけば，「自殺することから始めないでも，生れかわることができる」とした[15]。その場合，ロシア共同体の弱点である局地的小宇宙性と地主的土地所有の存在は，ロシア社会の全般的運動・全般的震撼のなかで，取り去ることが可能だとしている。最後にこの草稿は，ロシア共同体の有利な条件を2，3述べた後に，「分割地〔……〕[16]」という言葉でぶっつり切れてしまっている。このように第3草稿では，第1，草2稿に比べて，ロシアの共同体が発展しうる理論的可能性がより整理された形でまとめられているが，ロシアの現状分析，ロシアの共同体が発展しうる現実的可能性が述べられずに中断されている。

5　第4草稿

この草稿は，『手紙』本文とほぼ同じ内容で，ただ『資本論』からの引用と，それが西ヨーロッパに限定されているということが省略されている。

6　『手紙』本文

本文でマルクスは，ザスーリチが希望したような手みじかな説明文をおくれないことを述べ，誤解をはらすには数行で足りると述べている。そして，『資本論』の原始的蓄積論において展開されている運動は西ヨーロッパに限定されていること，したがって『資本論』の分析は農耕共同体の生命力についての賛否いずれの議論に対しても論拠を提供していない，という各草稿の最初の部分で展開されている内容が述べられ，一転して，草稿で述べられていた農耕共同体の歴史的位置づけ，構造的形態，歴史的環境，ロシアの現状分析などの重要な理論内容が省かれたまま，次のような確信を述べている。「私はこの問題について特殊研究を行ない，しかもその素材を原資料のなかに求めたのですが，その結果として，次のことを確信するようになりました。すなわち，この共同体はロシアにおける社会的再生の拠点であるが，それがそのようなものとして機能しうるためには，まずはじめに，あらゆる側面からこの共同体におそいかかっている有害な諸影響を除去すること，ついで自然発生的発展の正常な諸条件をこの共同体に確保することが必要であろう，と」[17]。

以上見てきたように，『下書き』と『手紙』を通じて共通している理論的内容は，『資本論』の原蓄論は西ヨーロッパに限定されており，ロシアの共同体の生命力についての賛否いずれの議論に対しても論拠を提供していないということだけである。そして，共同体発展の≪理論的可能性≫はともかくとして，≪現実的可能性≫については各草稿で全くニュアンスが異なっており，どの草稿を引用するかによって，どのような結論でも引き出すことができる。次に，なぜ草稿の中で述べられた，農耕共同体の歴史的位置づけ，構造的特徴，歴史的環境によるロシア共同体発展の可能性，ロシアの現状分析

とロシア革命論などが，『手紙』本文では省かれ，単に確信を述べるに終ってしまったのかを検討しよう。

1) 浅田喬二「マルクス・エンゲルスのロシア革命論」『土地制度史学』第48号6ページの注。なお私は，リヤザノフに従って草稿1，2，3，4，がその順序通りに書かれたと仮定して論を進めた。しかし，草稿2，3，4はその内容からみて，ザスリーチの手紙への回答として書かれたものに間違いないが草稿1は「ペテルブルク委員会あての論文」として書かれた可能性もあり，また草稿1，2，3，4がその順序通りに書かれたかどうかも検討の余地はあると思われる。
2) *Vera Zasulič an Marx*, ≪Archiv≫ Bd. I, SS. 316-7. なお邦訳は，山村訳，伊藤・荻原訳，平田訳などが出ているが，林直道訳（「ヴェラ・ザスーリチのマルクスへの手紙」『経済学雑誌』第67巻第1号38-40ページ）を参考にした。
3) Ebenda, S. 317.
4) *Die Konzepte*. ≪Archiv≫ Bd. I, S. 321,『全集』第19巻，389ページ。
5) Ebenda, S. 323, 同上書，391ページ。
6) Ebenda, S. 319, 同上書，387ページ。
7) Ebenda, S. 323, 同上書，391ページ。
8) Ebenda, S. 325, 同上書，394ページ。
9) Ebenda, S. 326, 同上書，395ページ。
10) Ebenda, S. 328, 同上書，398ページ。
11) Ebenda, S. 329, 同上書，398ページ。
12) Ebenda, S. 334, 同上書，403ページ。
13) Ebenda, S. 338, 同上書，408ページ。
14) Ebenda, S. 338, 同上書，408ページ。
15) Ebenda, S. 338, 同上書，408ページ。
16) Ebenda, S. 340,『マルクス・エンゲルス全集』改造社版，第21巻，424ページ，手島正毅訳『資本主義生産に先行する諸形態』国民文庫版，127ページ。なお『全集』には，この部分がぬけている。また第4草稿も省略されている。
17) *Marx an Zasulič*, ≪Archiv≫ Bd. I, SS. 341-2,『全集』第19巻239ページ。

Ⅲ　『手紙』をめぐって

1.　『手紙』簡略化の理由

『手紙』の最初の発見者であり，紹介者であるB.ニコラエフスキーは，この辺の事情について，『ゲゼルシャフト』誌上で次のように述べていた。すなわち，マルクスは「人民の意志」派（Народная воля）の闘争を支持しており，「総割替」派（Черный передел）には同感的ではなかった。したがって，「総割替」派であるヴェラ・ザスーリチに公表が予定されている回答を送ることをマルクスはためらっていた。「このような事情がヴェラ・ザスーリチ宛ての手紙におけるマルクスの態度を決定づけた。1878年のペテルブルク警視総監トレポフ将軍暗殺計画を通じて全世界の注目を集めていたヴェラ・ザスーリチに対し，マルクスは彼女の手紙への返事を出さずにはいられなかった。しかしマルクスは最大の自制心をもって，簡潔に，控え目に答えた。おそらく，当時マルクスの立場に近い人々の敵対者であるとマルクスが見なされたり，そうした人々に反対する議論を行なっているのだと見なされることを，マルクスは恐れていたのだろう」，と。[1)]

それに対し，リヤザノフはニコラエフスキーに反論しながら，次のように書いた。

「我々が公表する草稿から判るように，マルクスは詳細な回答を行なおうとしていた。『総割替』派に対するマルクスの不満が公表される詳細な回答をさし控えさせた，というニコラエフスキーの見解は明らかに間違っている。もしもマルクスがこの派にザスーリチが属していることを知っていたとしても，『総割替』派に対するマルクスの態度に影響を与えなかっただろう。マルクスに『土地と自由』の分裂についての情報を伝えたエル・ハルトマンも，エヌ・モロゾフも，ザスリッチに不都合なことを伝えることは全くできなかった。そこで私は，すでにマルクスとエンゲルスについての講義の中で述べたように，草稿の中にその痕跡が見いだされるような研究能力の低下が最初にマルクスが意図したように詳細な回答を行なうことを妨げたと，推測している。手紙の中に述べられている『人民の意志』の執行委員会と約束したことへの考慮もまた，そうすることを控えさせたのかもしれない」。[2)]

このようにリヤザノフは，『手紙』の内容が簡略化され理由を，研究能力

の低下と「人民の意志」執行委員会への約束の考慮の，２点において捉えていた。

平田清明氏は，ニコラエフスキーに近い見解をとりながら，次のように述べている。

「農耕共同体の世界史的位置づけ，これこそ，ザスーリチの質問のうち最も重要な論点をなすはずではなかったか。それを手紙本文に記載しなかったのは何故であろうか。それは『数カ月前に……サンクト・ペテルブルク委員会に約束した』ところのものと『同じ論題』だからではなかろうか。この論題についての論述は，彼マルクスにとっては，ザスーリチの属する『黒土再分割』派（『総割替』派のこと――引用者）よりもむしろ『人民の意志』派にこそ，送りとどけられるべき論稿であろう。……彼にとっては『黒土再分割』派という『空理空論家』を説得するために論稿を書くよりも，『人民の意志』派の要望に添って理論的活動を試みる方が，より有利だ，と判断された，と私には思われるのである。しかも，『公表』してその責任を引き受けるに足るだけの十分な準備が，第３草稿その(2)部分に欠けているのであり，『ことの詳細に立ち入る必要』を満すには『緊急の仕事を中断し』て推敲を重ねる必要があったのであろう[3)]」。

以上のように平田氏は，①詳細な回答は「人民の意志」派にこそ送られるべきであり，またそのことを約束していたから，②公表して責任を引き受けるに足る準備が欠けていたから，の２つの理由をあげている。

私は平田氏の指摘した②の理由こそ，この問題を解く鍵を握っていると考えている。第３草稿の前書きの中でマルクスは，次のように書いていた。

「２月16日付のあなたの手紙のなかで提出されている諸問題を根本的に論じるには，ことの詳細に立ちいることが必要でしようし，また緊急の仕事を中断しなければならないでしょう。しかし，私がいまあなたにさしあげるこの手みじかな説明でも，私の学説と言われるものにかんするあらゆる誤解を一掃するには十分であろうと，思われます[4)]」。

ここでは，ザスーリチの質問した問題を根本的に論じるには，緊急の仕事

（おそらく『資本論』第2巻と第3巻の最終的仕上げ）を中断するほどの準備と労力が必要なこと，逆にいえば根本的に論じる余裕がないことが，述べられている。第3草稿は，上述の前書きに続いて，『資本論』からは賛否いずれの論拠もひき出せないこと，そしてロシアの共同体が発展しうる≪理論的可能性≫が論じられていることから，根本的に論じることができないという内容は，おそらくロシアの現状分析，共同体発展の≪現実的可能性≫の部分だと推測される。だが，この≪理論的可能性≫の展開も途中で中断され，『手紙』本文にはこの部分さえないことから見て，≪理論的可能性≫の論証さえも充分に科学的に行ないえないと草稿作成の過程でマルクスは考えたのではないだろうか。だからマルクスは『手紙』本文で次のように書いた。

「あなたが私にご提出になった問題について，公表を予定した手みじかな説明をお送りすることができないのは残念です。私はすでに数カ月前に，この同じ課題について論文を書くことをサンクト・ペテルブルク委員会に約束したのでした。しかしながら，私の学説と言われるものにかんする誤解についていっさいの疑念をあなたから一掃するには，数行で足りるだろうと，思われます[5]」。

こう述べた後マルクスは，『資本論』を引用し，その分析が西ヨーロッパに限定されているためロシアについてはどちらともいえないことを述べ，ザスーリチの提出した問題を根本的に，科学的に分析することなく，誤解をはらすことに限定したのである。ここで，「公表を予定した手みじかな説明」とは，ザスーリチが「もし，これらの諸問題にかんして多少とも詳細にあなたの考えを述べて頂くことを時間が許さないならば，どうか，せめて手紙の形式でなりと述べて頂き，それを私が翻訳しロシアにおいて公刊することを認めて下さるよう，お願いします[6]」と書いてきたことに照応している。マルクスは，翻訳しロシアで公刊するに足るだけの内容をもった回答を今は行いえないといっているのである。

このように，『下書き』と『手紙』のはしはしに，マルクスが草稿の理論的展開が不充分だと考えていた跡を，我々は見てとることができる。

2.　『手紙』を受けとった側

ところで，このように重要な内容をもっている『手紙』が，1923年にニコラエフスキーによってアクセリロード文庫から発見されるまで[7]，40年以上もの間公表されなかったことについて，リヤザノフは次のように書いている。

「当時私は，プレハーノフに手紙を書いて，ザスーリチの手紙に対するマルクスの回答がないかどうかを問合わせたが，否定的な返事をえた。ザスーリチに対しても，第3者を介して問合わせたが，結果はやはりよくなかった。アクセリロードに対しても聞いたかどうかははっきり覚えていない。恐らく同様の質問をし，やはり否定的な返事をえたのだったと思う。……我々は，プレハーノフも，当の相手であるザスーリチも，この手紙を全く忘れてしまっているのを見た。我々は，この手紙が呼び起す特別の関心事を考慮するならば，この忘却が極めて奇異な性格をもち，また恐らく専門の心理学者にとって人間の記憶装置の異常な不完全性について最も興味ある実例を示すものであることを，認めなければならない[8]」。

保田孝一氏は，この点を更に発展させ，「1881年のザスーリッチからの手紙に対するマルクスの回答がロシアのマルクス主義者に不利で，政敵ナロードニキを利すると考えたためかザスーリッチ，プレハーノフ，アクセリロードらによって40年間もひたかくかにかくされて保存されたという興味ある事実も考慮する必要があるであろう。プレハーノフらもやはり1人の人間にすぎなかったのである[9]」述べている。

ところが，最近発行された『マルクスとエンゲルスについてのロシアの同時代人』には次のような手紙が載せられている[10]。

≪ヂェイチとザスーリチから，パリのプレーノフへ≫

1881年3月10日　〔ジュネーブ〕

……3週間前に我々は，ベラがマルクスへ手紙で呼びかけることを企てた。その手紙では，ロシアの共同体の運命はいかなるものなのか，それは崩壊せねばならないのか，などということを質問し，またその事について我々

が出版するであろう特別の小論文を書いてくれるようマルクスに頼んだ。今日マルクスの返事を受けとったが，マルクスは数カ月前に同じ問題についてすでに『ペテルブルク執行委員会』にそのことを頼まれ，小論文を書いているということである。あなたがベラの質問への回答におけるマルクスの言葉の真実性を疑わないよう，私は言葉通りにあなたに写しとります……。

≪労働解放≫団選集1924年 No. 2 にはじめて発表

この手紙から，ザスーリチたちは，「ペテルブルク執行委員会」との先約のためにマルクスは出版を予定した小論文を送ることができないのだ，とマルクスの手紙を受けとっていたことがうかがえる。つまりザスーリチたちは，マルクスからの真の回答は，「ペテルブルク執行委員会」へあとで送られるであろう小論文で展開されることになっている，と考えていたのである。『手紙』本文にある「この共同体はロシアにおける社会的再生の拠点である」という叙述も，確信として，論証なしに述べられているため，その詳しい展開のある回答を「ペテルブルク執行委員会」あての小論文に期待していたのではないだろうか。[11] そう考えると，プレハーノフたちがリヤザノフの質問に否定的であったことがうなづける。リヤザノフの質問した「ザスーリチの手紙に対するマルクスの回答がないかどうか」という文意を，プレハーノフらは上述の手紙を念頭におきながら，公表される予定の回答の意に解したのではないだろうか。

また，次に紹介する文書によって『手紙』本文がザスーリチらによってひたかくしにされていたという保田氏と平田氏の主張は完全な誤りであることが判るし，また，ロシアの同時代人が「ペテルブルク執行委員会」あてのマルクスの手紙に大きな期待をよせていたことが判る。

≪カール・マルクスの追悼≫[12]

……1883年3月14日，マルクスはロンドンで亡くなった。あらゆる方面からの多くの声明は，社会主義者・革命家が，マルクスの強大な力の損失を強

く感じていたことを示していた。それらの声明に賛同しながら，我々ロシア人は，マルクスが我々の社会・革命運動に対して深い同情を持って接していたことを思い出さずにはいられない。マルクスの晩年に，『ペテルブルク委員会の依頼を受けて』（B. ザスーリチへの手紙においてマルクスが述べているように）我々の共同体の発展の可能性についての問題についての――この問題はロシア社会主義者にとって焦眉の重大性をもっている問題である――小論文を，ロシアのために特別に書くことに同情的に答えたように。残念ながら，マルクスがその仕事をなしとげる時間があったかどうかについての情報は持っていない。

≪「人民の意志」カレンダー≫
1883年への付録として最初に公表

この文書が，「人民の意志」派の出版物に掲載されたことに注目されたい。このことから『手紙』本文は，のちに「労働解放」団に結集する者の間だけでなく，「人民の意志」派の間にも知られていたことが判る。保田氏は，『手紙』がザスーリチたちに不利なために隠されていたと主張しているが，「ロシアの共同体はロシアにおける社会的再生の拠点である」という認識は，当時の「人民の意志」派と「総割替」派の共通の認識であったはずである。両派の対立は，この点にではなく，政治闘争とテロルをめぐる戦術上の対立であり，「総割替」派はかえって旧綱領派だったはずである。[13] またマルクスが「人民の意志」派を支持していたといっても，「人民の意志」派内部の見解はさまざまであったし，[14] マルクスが科学的認識として「人民の意志」派と同じ見解を持っていたかどうかということとは別のことであろう。[15]

3．ペテルブルク委員会

それでは，「サンクト・ペテルブルク委員会との約束」とは何なのか，また，「マルクスのペテルブルク委員会あての小論文」は残っているのだろうか。

平田清明氏は，ペテルブルク委員会からマルクスへの依頼の手紙を，1880

年10月25日付の「ロシア社会革命党執行委員会からマルクスへの手紙」[16]であるとしている。しかしこの手紙には，マルクスに対するそのような依頼なぞ全く含まれていない。この手紙は，執行委員会にとって必要なのは，ロシアの社会生活の現状をイギリスやアメリカに正しく知ってもらうことであり，その目的で派遣したレオ・ハルトマンをマルクスに助けて欲しい，というものである[17]。

マルクスは第4草稿で，「2カ月前に私はすでに，この同じ問題について論文を書くことを，サンクト・ペテルブルク委員会に約束しました[18]」と述べていることから，この約束の時期は1881年1月初め前後とみられる。

「人民の意志」派の活動家，A. H. モロゾフはまさにこのころ，『ロシア革命叢書』に論文を書いてもらおうと，ロンドンにマルクスを訪ねた[19]。モロゾフはその時の様子を，50数年後の1933年に「80年代はじめのカール・マルクスと『人民の意志』派」という回想録の中で，感動的に書いている。

「会話は主に，我々『人民の意志』派のことについて行なわれた。マルクスはそのことに非常に興味を示し，我々の専制への斗争が，マルクスや他のヨーロッパの人達には，何か途方もないことであり，幻想的なロマンとしてのみ考えられることだと述べた[20]」。そして「マルクスは私に，『社会革命叢書』のために喜んで一つならずの論文を提供するだろうし，また我々が選んだ論文の翻訳の校正を送ったらすぐに，その論文への短い序文を書こう，といった[21]」。ここで述べられている「一つならずの論文」こそ，ペテルブルク委員会と約束した論文に他ならなかった。『マルクス年譜』では，次のように断定されている。「1月頃，ロシアの革命家ニコライ・モロゾフ，ハルトマンの紹介でマルクスを訪問し，『人民の意志』党の代表として，ジュネーブで発行される同党の機関紙への寄稿をマルクスに頼み，またとくに『土地と自由』党の分裂について知らせる。マルクス，彼の希望に応じて，ロシアの土地共同体の問題にかんする論文を，『人民の意志』党執行委員会のために執筆することを約束する[22]」。

さて，それでは，マルクスによって執筆することが約束されていたペテル

ブルク委員会あての論文はどうなったのだろうか。

我々は先に，『手紙』が簡略化された理由として，マルクスがザスーリチの問題に対し，公刊するに足るだけ根本的に論じる準備と余裕がないことを見てきた。そしてロシアの現状分析，つまり共同体発展の≪現実的可能性≫の部分だけではなく，農耕共同体の歴史的位置づけ，つまり共同体発展の≪理論的可能性≫の部分までも，第3草稿においては自ら筆を折っていたことを見てきた。

マルクスはその晩年に，完成が急がれていた『資本論』のためとはいいがたいような厖大なロシアの現状分析と古代社会についてのノートを作っていた[23]。特に，1881年終りから1882年初めにかけては，1870年代はじめからマルクスによって研究され蓄積された1861年の農奴解放とそれ以後のロシアの発展についての重要な資料の体系化が行なわれている[24]。この体系化のためにマルクスは，スクレビツキーやチェルヌイシェフスキーの著作を再度読みなおし，またスカルディン，ヤンソン，ダニエリソン，ゴロバチェフなどからとられた資料，さらに『租税委員会報告書』，『戦時統計集』，『農業状態調査委員会報告書』などからの資料を整理している[25]。この体系化された草稿は，「1861年の改革と改革後のロシアの発展についての覚え書」と題されてアルヒーフに収められたが[26]，これこそロシアについての厖大なノートや草稿類の中で唯一印刷を予定した，まとまった内容をもっているものであった。

「覚え書」は，「零落農民の肩への異常な重圧を加えたところの改革のブルジョア的性格，農奴制の遺物の分析，また同様に，敵対的社会関係が生みだす階級闘争の問題といった，改革の内容にマルクスの注意が向けられていた[27]」。まさにこのようなロシアの現状分析こそ『下書き』で不充分だったものではなかっただろうか。私は，この「1861年の改革と改革後のロシアの発展についての覚え書」こそ，ペテルブルク委員会と約束した論文の一部だ，と推測したい。妻イエンニーの死(1881年12月2日)に面しながら，また自らも療養のためワイト島やアルジェにおもむかざるをえない状態にありながら，『資本論』第2巻，3巻のために用いるには迂遠なロシアの現状分析に労力

をさいていったのは，かの約束があったからではないだろうか。『手紙』ではアイマイな形でしか答えることのできなかったロシア革命への展望は――ロシア共同体の分解程度，ロシアの階級配置，来るべき革命の性格，ヨーロッパ革命との関連など――このような現状分析に基づいてこそはじめて打ち出せるはずのものではなかったか。帝国主義段階への移行に際して生じた複雑な現象も，マルクスの目をひいたにちがいない。しかし，マルクスがいかなるロシア革命の展望を抱いていたかについては残された厖大な草稿・ノート類の検討を待たねばならない。[28)]

またマルクスはこの時期に，モルガンの『古代社会』をはじめ，メーン，ゾーム，タイラーなど古代社会についての著作を読み，詳細なノートを作っているし，また，ヨーロッパ史の諸事件の年表「年代記ノート」作っている。

田中真晴氏は「わたしはむしろ，マルクスが生涯のおわり近くに，一見不思議なような，一種の事件史的な年表をつくっていることのうちに，晩年のマルクスの知的営為の測りがたさのごときものを，第1に感じる」[29)]と書いているが，私はこれも，『下書き』で中断されてしまった農耕共同体の歴史的位置づけを，より完全なものとして公表しようとしたためではないかと推測したい。「年代記ノート」は，「リュリコビッチ皇帝とカール大帝との同一性において原始共同体体制から封建制への移行を明らかにしようとしたもの」[30)]，つまり，ロシア史と西ヨーロッパ史との比較検討において共同体の歴史的位置づけを明らかにしようというものではなかっただろうか。

しかし，老マルクスの以上のような晩年の研究にもかかわらず，彼自身によって完成された『ペテルブルク委員会あての論文』は残されずに終ったのである。

1) B. Nikolajewski, *Marx und das russische Problem*, ≪Die Gesellschaft≫ I, 1924, SS. 365-6.
2) D. Rjazanov, *Vera Zasulič und Karl Marx zur Einführung*, ≪Archiv≫ Bd. I, S. 311.

3) 平田清明，前掲論文，『展望』11月号，172ページ。
4) *Die Konzepte*, ≪Archiv≫ Bd. I, S. 334, 『全集』第19巻，404ページ。
5) *Marx an Zasulič*, ≪Archiv≫ Bd. I, S. 341, 同上書，238ページ。
6) *Vera Zasulič an Marx*, ≪Archiv≫ Bd. I, S. 317.
7) D. Rjazanov, *Zur Einführung*, ≪Archiv≫ Bd. I, S. 310.
8) Ebenda, SS. 309-310.
9) 保田孝一，前掲書，12ページ。また平田清明氏も，同様に，「かのザスーリチ宛マルクスの手紙は，敢えて公表しなかった。この『公表を予定された』はずの手紙は，いわば，握りつぶされたのであった」（平田清明，前掲論文，『展望』10月号，55ページ）としている。
10) Л. Г. Дейч и В. И. Засулич—Г. В. иР. М. Плехановым, ≪Русские современники о К. Марксе и ф. Энгельсе≫（以下《РСМЭ》と略），М., 1969, стр. 193-4.
11) ニコラエフスキーは，マルクスが『手紙』で述べたまさにその後の展開こそ，ザスーリチたちの聞きたかったことだ，といっている(B. Nikolajewski, a. a. O., S. 360)。
12) Некролог Карла Маркса, 《РСМЭ》, стр. 239. なお≪アルヒーフ≫には，この≪「人民の意志」カレンダー≫の出版は1889年と記されている（≪Archiv≫ Bd. I, S. 309).
しかし，この文書の≪カール・マルクスの追悼≫という題名からもうかがえるように，1883年の方が正しいと思われる。
13) 松岡保「ナロードニキ主義」『ロシア革命の研究』(1968年中央公論社)60ページ。
14) モロゾフは次のように云っている。「全ての『人民の意志』派が同じイデオロギーを持っていたと考えるのは，理由のないことである。」「問題は次のことにあった。我々がそれらの人々を組織に受け入れたのは，そのイデオロギーの細目においてではなく，共通の敵との闘争での自己の生命を賭してのエネルギーと準備においてであった」（Н. А. Морозов, Карл Маркс и ≪Народная воля≫ в начале 80-х годов, 《РСМЭ》, стр. 80)。
15) この点は，平田氏と竹内氏との基本的な論争点である。『資本論』の翻訳者として知られるロパーチンは次のように書いている。「ロシアが資本主義的発展段階を免がれることを，ロシアの共同体が助けるという期待について，マルクスは私に決して無条件的にも，何らか確定的にも語ったことはなかった。マルクスが一瞬たりともそのそのことを信じていたとは，私は思わない。」「私はラヴロフからも，チホミーロフからも，オシャーニンからも，他の誰からも，マルクスが『人民の意志』派の代弁者（агент）であり，そう思われており，そう命名されていたなどとは聞いたことがない。私ははじめてその作り話を聞いた。しかし，マルクスのあらゆる革命的運動に対する広汎な同情，自分の不変のものさしをあら

ゆる国，時機，国民にあてはめることをマルクスは嫌がっていたこと，いわゆるテロリズムに対して，an und für sich に，つまりいつでも，どこででもマルクスは嫌悪感を抱いていたのではなくて，反対にアイルランドやロシアのそうした種類の献身的行為に対するはなはだ同情的関係などを，私は聞いていたので，マルクスが『人民の意志』派の人々と喜んで会ったり交際した，ということを疑わない——たとえ彼らが名高いテロ的行動（たとえばハルトマンなど）に関与していたということを，マルクスが予め知っていたにしても。そしてまた，マルクスが彼らに力に応じた援助を与えていたことを，私は疑わない。しかしそうしたことは決してマルクスが代弁者だということを意味するのではない」（Г. А. Лопатин—А. Финн-Енотаевскому, ≪РСМЭ≫, стр. 52)。

16) К. Маркс, Ф. Энгельс и революционная Россия（以下≪МЭРР≫と略）М., 1967, стр. 427-8, 平田清明，前掲論文，『展望』10月号，44-5ページに掲載されている。

17) Там же, стр. 428, 同上論文，45ページ。

18) *Die Konzepte*, ≪Archiv≫, S. 340.

19) Н. А. Морозов, Указ. соч., стр. 81.

20) Там же, стр. 83.

21) Там же, стр. 82. またモロゾフは，ここで述べられている，翻訳されたマルクスの論文への序文とは，1882年に書かれた『共産党宣言』ロシア語版への序文に他ならないとしている。この序文は，プレハーノフの提案によって企画され（≪РСМЭ≫, стр. 90)，あまり乗り気ではないラヴロフにプレハーノフが頼みこんで，ラヴロフからマルクスとエンゲルスに依頼され（≪МЭРР≫, стр. 457-8)，1882年1月23日に序文の原文が，マルクスからラヴロフに送られている(≪МЭРР≫, стр.459)。しかし，モロゾフの主張が正しいとすると，序文を書いてもらうことの約束は，すでにモロゾフによってなされていたことになる。モロゾフは，序文の内容は「マルクスが私に別れの際に述べた言葉とほとんど同じだった。マルクスは『ガッチナに』の代りに『ツアーの村に』と述べていた」（≪РСМЭ≫, стр. 84）と書いている。

22) *Karl Marx, Chronic seines Lebens in Einzeldaten*, M, 1934, 邦訳『マルクス年譜』(1960年青木書店）487ページ。

23) その詳細については，田中真晴「晩年のマルクス覚え書」『経済論叢』第109巻第1号を参照。

24) Архив Маркса и Энгельса,（以下《Архив》と略）XI, 1952, стр. Ⅳ.

25) Там же, стр. Ⅴ.

26) Там же, стр. 3-28, 『全集』第19巻410-430ページ。なお，この「覚え書」を検討した論文として次のようなものがある。Р. П. Концшая, Изучение К.

Марксом социально-экономического развития России после реформы 1861 года,《Вопросы истории》, 1953 No. 5, А. Тушунов, Маркс об экономике пореформенной России.《Вопросы экономики》, 1953 No. 3.

27) 《Архив》 XI, стр. V.

28) セレズネフによれば，《Архив》 XI—XIII巻に収められている資料は，マルクスの作成したロシア関係の抜萃，概要，注意書，本の余白への書き込みのすべて（200印刷全紙＝3200ページ分）のうちの3分の1にすぎないという（К. Л. Селезнев, Русские современники о К, Марксе и ф. Энгельсе,《История СССР》, 1970 No. 5, стр. 125-6)。

29) 田中真晴，前掲論文，163ページ。

30) Н. Л. Рубинштеин, Русская историография, М. 1941, стр. 607. なお，「年代記ノート」を扱った論文としては，次のものがある。Из рукописи К. Маркса《Хронологические выписки》,《Большевик》, 1936 No. 24,《Хронологические выпииски》К. Маркса по истории России,《Пролетарская революция》, 1940 No. 3.

Ⅳ　ロシア共同体の歴史的位置

1.　当時の論争

次に我々は，なぜ第3草稿において農耕共同体の歴史的位置づけさえも中断されてしまったか，つまりマルクスは何が不充分だと考えていたのかを検討することにしよう。この問題を考える場合，当時のミール共同体をめぐる論争の中でマルクスの見解を位置づけることが必要である。

ロシアにおける農耕共同体の問題は，ラジシチェフ（А. Радищев）がすでに18世紀末に提起しており，また19世紀初頭にもヤーコプ（Якоб）によって提起されていた。しかしこれらの議論もハクストハウゼン（A. v. Haxthausen）の登場まではさほど注目を集めていたわけではなかった。[1)]

プロシアの参事官ハクストハウゼンは，1843年にヨーロッパ・ロシアのほぼ全域を旅行し，その体験をもとに1847年に『ロシアの国内事情，国民生活，とくに農村制度の研究』[2)]を書きあげた。この著作によって彼は，エンゲルスによって，「ロシアに土地共有制を発見し」[3)]た人として評価され，また一般

に，西ヨーロッパにはじめてロシアの農耕共同体すなわちミール（Мир）を紹介した人として評価されている。[4] ハクストハウゼンはミール共同体を次のようにとらえていた。①ミールの制度的中核である土地共有制はスラヴ民族に固有なものである。[5] ②ミールは，土地の私有という考えが不要な遊牧生活に由来する，[6] 原スラヴ的・血縁的・家父長的共同体の末裔である。[7] ③その社会的意義は，土地の平等割替によって全ての共同体員に土地が保障されているので，「ロシアにはプロレタリアートは生まれない」し，また「ヨーロッパの革命家たちのユートピアがここに存在している」[8] ということである。このようなハクストハウゼンの主張は，ミールを理想化し，ロシアこそ行き詰った西欧社会を乗り越えることのできる唯一の国である，とするスラヴ主義者に大きな刺激を与えた。[9]

これに対し，チチェーリン（Б. Н. Чичерин）は，1856年にハクストハウゼンに対する反論を≪ロシア通報（Русский Вестник）≫誌上に発表し，[10] ロシアの歴史家たちの間での学問的論争の口火を切った。チチェーリンは次のように主張した。①土地共有制はあらゆる民族の原始的段階に見られるものであり，ロシアにおいても他の民族と同様に，かつて氏族的・家父長的共同体が存在していた。[11] ②ハクストハウゼンはそのような氏族的・家父長的共同体が近代まで維持されてきたといっているが，それは10世紀ごろ，自由意志を基礎とする個人的目的によって結びついた従士団（дружина）と公（князь）の権力の増大，更にはノルマン人（Варяг）の侵入によって崩壊し，[12] 地縁的・領主的共同体に変った。ここでは私的所有が急速に発展し，「土地を共同で所有せず，個々の成員の相続権が認められ，土地の割替も行なわれず，他の土地へ移動する権利も制限されず，農民は大きな村に結合されることもなく，共同体裁判，農民裁判，共同体警察それに共同体的経営制度もなかった。全ては税を集め，領主のために納税義務を遂行することにとどまっていた。村落共同体の意義は純粋に領主的・財政的なものだった」。[13] ③近代の村落共同体は，「少しも家父長的で氏族的なものではなく，国家的なものである。それは人々の自然的結合からひとりでに形成されたものではなく，国家的原理の直

接の影響下で，政府によって創出された[14]」ものであり，平等土地割替は農民の土地への緊縛と1724年の人頭税の制定という外的契機によって出現した[15]。

以上のようなチチェーリンの主張は西欧主義者に引き継がれていった。西欧主義者は，西ヨーロッパにおいて共同体が消滅したように，ロシアにおいてもそれは社会の進歩とともに崩壊するであろうし，今やそれは，ロシアの経済的発展に敵対している，と主張した。そしてミールが国家による人工的な産物なのだから，国家はそれを崩壊させる権利も持っている，とした[16]。

チチェーリンの論文が発表されるとすぐに，スラヴ主義者のベリヤーエフ（И. Д. Беляев）は，『ロシア対談（Русская беседа）』誌上にチチェーリンへの反論を発表した[17]。ベリヤーエフらスラヴ主義者は，①ロシアの共同体は自治的であるという点で西欧の共同体とは区別される，②ロシアの共同体は家父長的でも氏族的でも国家的でもなく，人々の自然な結合体であり，平等な権利を持つ人々の自由な契約から生じた，③このような共同体制度は歴史の曙から現在までロシアの歴史の基礎にあった，と主張した[18]。

ミールの起源をどう把握するかということは，一般に，ミールの現在の性格はいかなるものかということにかかわる問題であった。共同体所有を歴史的継続性のうちに理解する連続性理論においては，ミールの農民自治的側面が強調され，連続性理論の反対者においては，近代の産物もしくは国家的・地主的イニシアティブの産物という起源の理解から，行政的・財政的・領主的側面が強調されがちであった[19]。またゲルツェン，チェルヌイシェフスキーらはミールの行政的・財政的側面を認めながら，このような性格をはぎとったミールは，適当な条件のもとに社会主義の基礎となりうる農民自治的要素を持っていると見ていた[20]。

スラヴ主義者以外の連続性理論の支持者は次のごとくであった。ソコロフスキー（П. А. Соколовский），レシコフ（В. Лешков），ウラジミールスキー・ブダーノフ（М. Ф. Владимирский-Буданов）などは，マウラーのマルク共同体論の影響を受け，ミールの起源をヴォロスチ（Волость），もしくはルスカヤ・プラウダのヴェルヴィ（Вервь）などの地縁的組織に求め

た。レオントビッチ（Ф. Леонтвич），ブリューメンフェルド（Г. Ф. Влюменфелд）らは，ヴェルヴィを世帯共同体と見なし，南スラヴのザドルーガ（задруга）との類推を行なった。そして世帯共同体が，人口の増加，成員間の不平等の発生，血縁以外の者の流入などによって血縁的結びつきをしだいになくすことによって近代のミールが生じたとした。歴史法学派のカヴェーリン（К. Д. Кавелин），ソロヴィエフ（С. М. Соловьев）は，原始的な家父長的氏族共同体の残りかすがミールに他ならないとした。非連続性理論の支持者は，チチェーリン，ミリューコフ（П. Н, Милюков）などの国家学派がその中心であった。[21)]

これに対してセルゲーヴィッチ（В. И. Сергеевич）は，以上のような議論に全く正反対の立場をとった。[22)] セルゲーヴィッチは，マウラーを批判し，古ゲルマンにおいては私的所有が支配的であり，土地の豊富さのために共同体成員は自由に土地を占有できたが，土地が不足するにつれて秩序維持のため共同体的土地所有が出現した，と主張した。[23)] そしてこのことはロシアについてもあてはまり，ロシア史においては共同体的土地所有のどんな痕跡も残されていない，といいきった。[24)] そしてロシアにおける割替的土地制度をもたらしたのは，土地不足と国家によって課された人頭税によってであるとした。[25)]

以上のように論争は複雑に入り組んでいたが，主要な論点は次のようにまとめることができる。①土地共有制もしくは共同体的土地所有は，あらゆる民族の原始段階に見られるものなのか，それともセルゲーヴィッチのいうように私的所有からのちに生じたものなのか，あるいはスラヴ主義者が主張するようにロシアだけに固有なものなのか。②近代ロシアのミールは，原始社会段階に存在していたものの継続としてとらえられるのか，それとも土地不足や国家・地主などのイニシアティブによってかなり後になって成立したものなのか。③ミールの社会的意義は何なのか，それはロシアの「近代化」とともに消えさる運命にあるのかそれとも未来社会の基礎となりうるのか。

このような論争に，マルクスはどのようにかかわっていったのか，またそれは『下書き』にどのように反映しているのかを，次に見ていこう。

2.　マルクスとミール共同体

マルクスは,1845年—46年に書かれた『ドイツ・イデオロギー』において,次のように述べていた。

「所有の最初の形態は部族所有である。これは人々が狩猟と魚撈で,牧畜であるいはせいぜいのところ農耕で食っているような生産の未発達な段階に対応する。このあとのほうの農耕の場合には部族所有は広い未墾の地所を前提とする。労働の分割はこの段階にあってはまだほとんど発展しておらず,家族のなかでおこなわれている自然発生的な分業をもっと広げる程度にかぎられる。それゆえに社会的編成は家族の延長以上には出ない。すなわち家父長制的部族長,そのもとに部族員,最後に奴隷・家族のうちに潜在している奴隷制は人口と需要の増大につれ,また戦争と交易といった対外的交通のひろがりにつれて,はじめて除々に展開する[26]」。

「近ごろの法制史的諸研究が明らかにしたことは,ローマにおいてもゲルマン,ケルトおよびスラヴの諸民族のもとでも,所有の発展は共同体所有あるいは部族所有から出発し,本来の私的所有はどこでも簒奪によって発生したということである[27]」。

このようにマルクスは,1840年代においてすでに,所有の最初の形態は部族所有もしくは共同体所有であり,その後に私的所有が発生した,と指摘していた。しかしこの段階での科学知識の水準のために,より具体的な規定を与えることはできなかった。しかも,『共産党宣言』の冒頭の一節「今日までのあらゆる社会の歴史は,階級闘争の歴史である[28]」という規定に見られるように,この時期の部族所有もしくは共同体所有は多分に階級社会の組織形態としてとらえており,『ドイツ・イデオロギー』における上述の規定でも,部族所有の社会組織が身分差・階級差をもつこと,奴隷を内包していることが指摘されていた。ここではまだ,原始社会と階級社会との区別,第1次構成と第2次構成との区別がなされていなかった。だからエンゲルスは,のちにこの点を不充分だとして,「すなわち,(ここに言う歴史は—引用者)

あらゆる書かれた歴史である。1847年には，社会の前史，すなわち記録された歴史に先行する社会組織は全然といっていいほど知られていなかった。[29]」と記したのである。そして，1853年にマルクスは，スコットランドのクランと比較しながらその当時のロシアの共同体がこのような氏族的構成に所属すると書いていた。[30]

1858年の『資本主義生産に先行する諸形態』においては新たな展開が見られる。マルクスは，「この所有の本源的形態は，それ自体直接的な共同所有である。（東洋的形態は，スラヴ的所有では変形されているか，古代的およびゲルマン的所有では対立物に発展している，対立物であっても，しかもなおそのかくれた基礎をなしている）[31]」と述べ，共同所有が一元的なものではなく，種々の段階に分かれていることを指摘した。そしてロシアの共同体は，純粋な氏族的・共同体所有ではなく，その変形されたものとされていた。また，ほぼ同じ頃に書かれた『経済学批判』においては，スラヴ主義者を批判して，「原生的な共有の形態は，とくにスラヴ的な，しかももっぱらロシア的な形態だというのは，近ごろひろまっている笑うべき偏見である。それは，われわれがローマ人，ゲルマン人，ケルト人のあいだで指摘することのできる原初形態である[32]」として，原始的な共有がヨーロッパのどこでも端緒をなしていることを強調した。[33]

だがマルクスは，この段階では「アーリア人問題」の影響を強く受けていた。原始的共同体所有がヨーロッパのどこでも端緒をなしているという理由を，マルクスは，インド・ヨーロッパ語族が原住地インドからヨーロッパに移動したことによってもたらされた，と誤って考えていた。[34]そして，パヴェル・リリエンフェルドらがロシアの共同体所有が遊牧民族タタールの侵入によってもたらされたと主張しているのを批判しながら，「この共同体所有は蒙古人のものだというのは，歴史の虚構だ。僕の著書のなかでたびたび暗示したように，共同所有はインド系統のものであり，したがって，ヨーロッパのすべての文明国民のもとで彼らの発展の開始期に見い出されるものだ。しかも，ロシアにおける共同所有の独自にスラヴ的な（蒙古的ではない）形態

それはロシア的でない南スラヴ人のもとでも再現する）は，必要な変更を加えれば，インド的共同所有の古ドイツ的変形と最も多くの相似性をもっている[35]」と述べた。このようにマルクスは，「アーリア人問題」の強い影響を受け，アーリア系に属するロシアの共同体と古ゲルマンの共同体との相似性を指摘していた。そして，古ゲルマンの共同体とロシアの共同体との相違を次のように述べていた。

「後者（シェドーフェロティー引用者）が次のように言っているのは大まちがいだ――そもそもこれはまったく浅薄な男なのだが。すなわち，彼は，ロシアの共同体は農民が土地を離れることの禁止の結果としてはじめて発生した，と言っているのだ。全事態が，ごく小さな点に至るまで，原始ゲルマンの共同体とまったく同じなのだ。ロシア人の場合につけ加わるものは（そしてこれはインドの共同体の一部分でも見いだされる，パンジャブでは見られないが南部では見られる），①共同体の首長の民主的でなく家父長的な性格と，②国家などへの納税についての連帯責任とだ。第2の点から出てくるのは，ロシアの農民は勤勉であるばあるほどますます国家によって搾取されるということだ[36]」。

このようにマルクスは，古ゲルマンの共同体との相違を，①家父長的性格，②連帯責任制，という階級的内容においておさえていた。そして，「ロシアの共同体は農民が土地を離れることの禁止の結果としてはじめて発生した」という見解への批判は，農民が土地に緊縛されていなかった古ゲルマンにおいてもそのような共同体が存在していたではないかという，ごく一般的な批判にとどまっていた。同様のことが，ダニエリソンあての次の手紙からも言える。

「ロシアにおける共同所有の歴史的発展に関するチチェーリンの見解について，またこの問題での彼とベリヤーエフとの論争について，いくらかご教示願えればたいへん有難く思います。この所有形態が（歴史的に）ロシアで創設された仕方は，もちろん2次的な問題であって，この制度の意義とはなんの関係もありません。ところが，ドイツの反動主義者たち，たとえばベル

リンのA.ヴァーグナー教授などは，チチェーリンが彼らの手に渡す武器を振り回しているのです。しかも，歴史的類推はすべてチチェーリンの説には反対なのです。この制度はロシア以外ではどこでも自然的に発生して自由な諸民族の発展の一段階を形成していたのに，それがロシアでは単に国家の方策として，農奴制の随伴現象として，導入されたというようなことが，いったいどうして可能なのでしょうか？[37]」

ここでもやはりマルクスは，他の諸民族においては自然的に発生した共同体が，ロシアでだけ国家の方策として，農奴制に伴って発生したとは考えられないという，一般論的批判を行なっている。しかし，前節で検討したように，チチェーリンは「歴史的類推」によって，このような共同体制度がロシアにおいても自然的に発生して一段階を成していたことを認めていた。従って，マルクスのこのチチェーリン批判は，全く当っていない。

要するにマルクスは，このダニエソンあての手紙を書いた段階において，前節で述べたロシア共同体をめぐる3つの論点のうちの最初の論点しか知らなかったのである。ロシア農耕共同体の歴史的位置を明らかにするためには，もう1つの論点，近代ロシアのミールは，原始段階に存在していた共同体の継続としてとらえられるのか，それとも土地不足や国家・地主的イニシアティブのもとで，かなり後になって成立したものなのか，という点が解明される必要があったのである。この問題は他の諸民族との類推だけでは解明できない問題であった。残念ながら，これ以後1881年の『下書き』まで，この問題を正面から扱った文書は残されていない。

だが，チチェーリンの見解とベリャーエフとの論争について教えて欲しいというマルクスからの手紙を受け取ったダニエリソンは，非常に長文の返事を書いた。その中でダニエリソンは，ベリャーエフがスラヴ主義者であり，『ロシアの農民』という書名にもかかわらず農民の歴史を書かずに農奴制の歴史を書いたこと，他の社会関係と農民との関連づけなしに単に事実を羅列しているにすぎないこと，ロシアに大変動をもたらしたタタールについて一言も触れていないこと，などを批判し[38]，次のように述べた。

「以上の全ての理由から，私は，ベリャーエフとの論争において，チチェーリンの方が正しいと思う。農奴制とともに我々に知られている共同体は，自己の存在を財政的手段に拠っていた。それ自体の関係においては何も新しいものを案出せずに。だが新しい政体の全発展が，共同体からあらゆる結びつきの理由を奪った後に，その同じ発展が，その崩壊しつつある制度を強制的に，しかも重い束縛によって結びつける可能性を政府に与えた。初期の共同体の成員は共通の利害によって結びついていた。後に，自己の無力さを経験し，崩壊に近づいた時に，共同体は政府の財政的利害によって強制的に結びつけられたのである」[39]。

こうしてダニエリソンは，チチェーリンを支持し，近代のミール共同体が政府の財政的利害によって結びつけられ，そのため農奴制的・財政的性格を持っていることを指摘した。そしてマルクスがロシアの共同体の歴史的発展を研究するための重要な文献を紹介した。マルクスがミール共同体の発生史的特質に注目を払ったのは，これ以後のことであろう。

1878年に作成された，ゲーリエとチチェーリンの著作『ロシアのディレッタンティズムと共同体的土地所有』からの抜萃ノートには，次のような1節が記されている。

「固定資産（家，屋敷地）の相続権は，イヴァンⅢ，Ⅳ世などの法典に明記されている。農民のもとでもそれがあったことは，特別勅令から明らかである。農民が定住した土地は世襲的に引渡された（195，196ページ）。

ベリャーエフでさえ『ロシアの農民』96ページで，古ルーシにおける農民的土地所有が『ミール的ではなく，個別的（участковое）であった』ことを認めていた（199ページ）。

ソコロフスキーの著作『北部ロシア村落共同体史』について，チチェーリンは次のように述べている。ソコロフスキーはヴォロスチが管理している空地を，ヴォロスチが平等な分け前で分配したということを，証明していない。それと同時に，彼は，あてがわれた土地を個々の農民が完全に処分する権利を，否定していない。史料は次のことを述べているだけである。ヴォロ

スチは新しい移住者と協定し，その際各移住者は，適当なだけ，もしくは耕作しうるだけの土地を受け取った。その結果，ソコロフスキーによれば，同一の村においてでさえ，1つの区画地が他の3倍の大きさであることもあった。とはいえ，ソコロフスキーの研究によれば，部落はたいてい2—3の農戸からのみ，そしてしばしば1つの農戸からのみ構成されていた[40]」。

「我々はまた，それぞれの場合に，いつ，いかにして自由な土地所有権の移動が禁止され，ミール的所有が実施されたのかを直接知っている[41]」。

このようにマルクスは，キエフ・ルーシやモスクワ・ルーシにおいて，固定資産の相続制，土地の世襲化，自由な土地所有権の移動などといった，私的所有の発展があったことをノートしている。また，かつては，集村制ではなく散居制が支配的であったこともノートしている。こうした歴史的事実は，これまでのマルクス視野からはみ出たものではなかったたろうか。

このような認識が『下書き』にも反映しているように思われる。『下書き』第1，2草稿において，マルクスは，「ここには，私的所有の1つの形態から私的所有の他の1つの形態への転化があるわけだ。ロシアの農民の手中にある土地は，かつて彼らの私的所有であったことはなかったのだから，どうしてこの発展がそこに適用されうるのであろうか[42]」と書いていた。ところが，第3草稿と『手紙』本文において，この部分は，「この西ヨーロッパの運動においては，私的所有の1つの形態から私的所有の他の1つの形態への転化が問題となっているのである。これに反して，ロシアの農民にあっては，彼らの共同所有を私的所有に転化させることが問題なのであろう[43]」，と書き直され，かつてロシアの土地所有形態がいかなるものだったのかという問題を回避したのである。

さらに『下書き』は，ロシアの共同体に即して，ロシア共同体の「歴史的位置づけとその構造上の形態を分析するのではなく，古ゲルマンの共同体などとの類推という方法をとっていたため，「1868年11月7日付エンゲルスあての手紙」で指摘されていた，家父長的性格と連帯責任というロシア共同体の特質（古ゲルマン共同体では欠如しているもの），ダニエリソンが強調し

ている農奴制的・財政的性格などが欠落したままだった。

以上のようなロシア共同体をめぐる論争におけるミールの発生史的特質，家父長的・連帯責任的・農奴制的性格，ロシア中世史における（古代史においてではなく）私的所有の発展と割替制の存否，などの諸問題を考慮して，マルクスはロシア共同体の歴史的位置づけが『下書き』ではまだ不正確だと考えたのではないだろうか。

ロシア中世史の研究者 Ю. Г. アレクセーエフも，また次のように指摘している。

「それらの下書きから明らかなように，手に入った文献にもとづいてマルクスは，ロシアの19世紀の共同体を古代から特別の変化なく維持された原古的土地共同体と見なしていた。……しかし，結論稿（『手紙』本文のこと——引用者）には，ロシア共同体の古代性についての考察も，ロシア農民の独自性についての推測も含まれていなかった。マルクスは，そうした推測を確実に，そして根本的に行なうには不充分であると考え，それ故，草稿においてだけそれらが残された，ということは十中八九まで確実である」[44]。

3．現在の研究水準からみて

『下書き』に含まれている諸命題，特にロシア共同体の歴史的位置づけについての諸命題は，現在からみて充分科学的批判に耐えうるものだろうか。今この問題を全面的に検討することはできない，ここでは，重要と思われる2，3の点についてだけ記しておこう。

福富正実氏も強調するように，『下書き』は，共同体自体の継起的発展の諸段階を，血縁的・氏族的共同体→農耕共同体→新しい共同体，の3段階に分けていた[45]。ロシア史においても，血縁的・氏族的共同体が広汎に存在していたことが，考古学などの成果によって明らかにされている[46]。ところが，K. H. タルノフスキーによれば，このような血縁的・氏族的共同体は，東スラヴ人のもとでは，南部では6世紀ごろ，北部では7—8世紀ごろに，地縁的・村落共同体に移行したという[47]。この変化は，原始的焼畑農業から鉄製

の農具を用いる耕作農業への転換，畜力を用いる犂の出現，鉄生産物交換を基礎とした分業の発展などの生産力発展によって基本的にもたらされ，この高い生産力が原始共同体から直接封建制への移行を可能にした，とタルノフスキーは論じている。しかも注目すべきことは，地縁的・村落共同体の出現とともに，マルクスが土地割替をその特徴と考えていたような農耕共同体の段階は急速に通り過ぎてしまい，自由な土地所有権の移動，すなわちアロッド的土地所有が出現した，と述べていることである[48]。つまり，タルノフスキーは，キエフ・ルーシ成立期にすでに「新しい共同体」の成立をみている。

それほど遡らないまでも，チチェーリンが主張していたように，14—15世紀の共同体が基本的に「新しい共同体」であったことを示す多くの証拠がある。『14世紀末から16世紀初めの北東ルーシ社会経済史文書』や『14—16世紀の封建的土地所有と封建的経済文書』には，黒土（чёрные）農民が土地を売買したり，抵当に入れたりした史料や，ホロープ（холоп）が自分の分与地を他人に引渡したことを示す史料が収録されている[49]。Л. В. チェレープニンも，この時代には，牧草地，森林，水域，荒地などは共有であったが，耕地は個別的所有になっており，共同体の承認があればそれを処分できた，としているし，ゲールケもまた同様の指摘を行なっている[50]。したがってマルクスの命題が正しいとしたならば，近代において，新しい共同体→農耕共同体，の逆の進化が生じたとしなければならないだろう。

次に土地割替制の問題について見てみよう。マルクスは『下書き』において，タキトウス『ゲルマニア』第26章の問題の1節をマウラーに従って耕地の割替制として理解し，これとロシアの共同体を重ね合せるという方法をとっていた。しかし後にエンゲルスは，コヴァレフスキーを読んで，問題の1節を耕地の割替とするよりもむしろ農学的な意味に解釈する方がより難点を解決できる，と指摘していた[51]。古ゲルマン研究の進展は，古典的なマルク共同体理論をもはや批判ずみのものとしており[52]，また，太田秀通氏も，「エンゲルスのこの解釈の方が，タキトウスの原文に合った解釈であることは明らかであろう。したがって今にして思えば，割替耕地制に関しては，ヴェラ・

ザスーリチあてのマルクスの書簡の草稿におけるゲルマン的共同体の古い2段階についての判断は誤っていたのだと考えなければならない[53]」と主張している。

コヴァレフスキーは次のように述べていた。従来のロシア村落共同体の起源の研究は，古文書をもとにして行なわれていたが，15世紀以前の史料はほとんど存在しないため限界がある。ロシアは国土の広大さと異民族の侵入などで，地方ごとに歴史的発展がちがっているので，「ある地方では共同体発展の初期の段階にあり，他の地方では後期の段階に達している[54]」。従ってロシアの辺境地域の分析は古文書と同じ価値をもっている。こうしてコヴァレフスキーはロシア北部と南部に着目した。そしてドニエプルのステップの分析から，土地が豊富であったため農民は耕やせるだけの土地を耕作し，1度収穫がすむとその土地は捨てられ，毎年新しい土地が耕やされるという状態だったため，土地割替は考えられなかった，という結論を引き出した[55]。コヴァレフスキーによれば，タキトウスの問題の1節もこのような農学的な意味，つまり焼畑農業の意味に理解すべきだというのである。

焼畑農業においては，土地を自由に占取していたにしても，本来の意味での私有という観念は発生しえなかった。「焼畑農業は耕作地のない農業であった[56]」。ここでは耕地農業に比べ多くの労力を必要としたので，労働力の結合の形態として，大家族的世帯共同体が支配的だったし[57]，またそのような流動的生活のために散居制が支配的だった。北東ルーシにおいては大多数の部落が1—3の農戸によって構成されていたし[58]，14—15世紀のノヴゴロドでも散居制が支配的であったことを示す豊富な史料がある[59]。このことから，当時は，三圃制と並んで焼畑農業がまだかなり普及していたことが判る。土地はさほど不足してはいなかった。こうした状態のもとで，A. П. ピヤンコフが，「14—15世紀の北東ルーシの共同体は土地割替を知らなかった。共同体は土地を相続として譲渡することを認め，農民が自分のものとした土地を売払ったり，担保にしたりすることを許していた[60]」というのは正しいかもしれない。

ともあれ，コヴァレフスキー，カウフマン，ヴォロンツォフ，ゲールケなどは中世に割替制が存在していなかったということを前提に，土地割替制の近代における発生を，人口増加と土地不足，土地占取の不平等，人頭税の導入と連帯責任制の強化，などの契機から説明しようとしているし[61]，鈴木健夫氏も北部ロシアに限ってであるが，頭割りで賦課される税と保有地の不均等に対する不満から貧農の強い要求によって均等土地割替が実施されるに到った，としている[62]。

こうしたことから，我々は『下書き』の命題を，ロシアにおける共同体がいかなる発生史をもとうと，ロシア中世において「新しい共同体」の発展や割替制の欠如があったとしても，また農奴制的性格を色濃くもっていたとしてもともかく19世紀の共同体は「固有の2重性」をもっており，それは歴史的環境によってはより発展しうる可能性をもっていたのだ，と極めて限定的に受け取らねばならないかもしれない。ともかく『下書き』に含まれている諸命題は大いに検討の余地があるし，この検討は我々に残された課題である。

1) 増田富壽『ロシア農民社会の近代化過程』(1958年御茶の水書房) 5－6ページ。ハクストハウゼンが注目を集めたのは，西ヨーロッパにおける労働者問題の尖鋭化，ロシアの封建制から資本主義への移行期といった時代的背景があったからである (Н. М. Дружинин, Крестьянская община в оценке А. Гакстгаузена и его русских современников, 《Ежегодник Германской истории 1968 г.》. М., 1969, стр. 28)。

2) August von Haxthausen, *Studien über die innern Zustände, das Volksleben und insbesondere die ländlichen Einrichtungen Rußlands*, 3 Bde., Bde. 1-2 Hannover 1847, Bd. 3 Berlin 1852. 本稿はその英語版を用いた (*The Russian Empire, its people, institutions and resources*, tr. by Robert Farie, Lond 1856, Vol. 2)。英語版はドイツ語の原著に比べ大幅に圧縮され，重複が多いといった原著の欠陥が直されている (ibid., Vol. I, p. vii)。

3) エンゲルス「『共産党宣言』1888年英語版への註」『全集』第4巻475ページ。

4) Maxime Kovalevsky, *Modern customs and ancient law of Russia*, London 1891, P. 69. なお，ハクストハウゼンについては，鈴木健夫「ハクストハ

ウゼンのロシヤ農村共同体論」『早稲田大学院・経済学研究年報』第9号,ならびに,「農奴解放前のロシヤの農村共同体」『社会経済史学』第34巻第6号，などに詳しい。

5) ハクストハウゼンはプロシヤの農村制度の調査を行なっているうちに「ゲルマンに一般的な特徴でない特異な制度」(Haxthausen, op. cit., Vol. I, p. ix) にぶつかった。それこそマルク共同体の残滓にほかならなかったのであるが，彼はかつて居住していたスラヴ民族に起源をもつ制度とみて，スラヴ農村制度の原型を求めてロシヤ旅行に出かけたのであった。このような当初の問題意識からして，彼のロシア共同体論はスラヴ的・民族的性格の強調という側面を色濃く持たざるをえなかった。

6) ibid., Vol. II, p. 393.

7) ibid., Vol. I, p. xvi.

8) ibid., Vol. I, p. xvii.

9) П. И. Лященко, Социальная экономия сельского хозяйства, М., 1930, 直井武夫訳『マルクス主義農業経済学（上)』(1932年南北書院) 309-310ページ。またスラヴ主義者の思想を扱ったものとして，佐々木俊次『ロシヤ思想史――スラヴ思想の展開』(1960年地人書房) がある。

10) Б. Н. Чичерин, Обзорь исторического развития сельской общины вь России, 《Русский Вестник》, 1856. この論文はのちに，Опыты по истории русского права, М., 1858, に収められた。本稿ではこれを用いている。

11) Там же, стр. 4-5.

12) Там же, стр. 7-8. チチェーリンは征服に力点を置く外的契機を重視している。これは「国家学派」に共通の傾向だった。たとえばミリューコフは,「ロシア社会の『種族的状態』から『封建的構成』への移行が,『内部のバネ』を欠いたまま,戦争と交易という『外的状況』によって招来された」(鳥山成人「ペー・エヌ・ミリューコフと『国家学派』」『スラヴ研究』第12巻33ページ) と考えていた。

13) Чичерин, Указ. соч., стр. 57.

14) Там же, стр. 57.

15) Там же, стр. 44.

16) Рубинштеин, Указ. соч., стр. 273-5, Lazar Volin, *A century of Russian agriculture*, Massachusetts 1970, pp. 79-80.

17) И. Д. Беляев, О сельской обшине, 《Русская беседа》, 1856, кн. I.

18) Michael. B. Petrovich, *The peasant in nineteenth-century historiography*, 《The peasant in nineteenth-century Russia》 ed. by W. S. Vucinich, California 1968, pp. 209-210.

19) このような分類の仕方は，Carsten Goehrke, *Die Theorien über Entstehung*

und Entwicklung des „Mir", Wiesbaden 1964, S. 173, によっている．なおゲールケは，連続性理論，非連続性理論，経済理論の3つに分類している。

20) Н, Д. Казанцев, Утопический и научный социализм о переустройстве сельского хозяйства, М., 1969, стр, 72-4, Volin, op. cit., p. 82.

21) Goehrke, a. a. O., SS. 173-4, Petrorich, op. cit., pp. 209-216, С. М. Дубровский, Российская община в литературе XIX и начала XX в., 《Вопросы истории сельского хозяйства, крестьянства и революционного движения в России》 М., 1961, стр. 351-6.

22) セルゲーヴィッチは，1865年に早くもマウラー批判を行なっている（В. И. Сергеевич, Время возннкновения германской поземельной общины, 《Журнале Министерства народного дросвещения》 1865, No. 1)。彼のミール論は，Русские юридические древности, т. Ⅲ, において展開された。

23) В. В. 〔Воронцов〕, Учения о происхождении земельной общины в России, 《Вестник Европы》, 1910, No. 4, стр. 250.

24) Б. Д. Греков. Киевская Русь, госполитиздат 1953, стр. 77.

25) В. В.. Указ. соч., стр. 279.

26) マルクス，エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」『全集』第3巻18ページ。

27) 同上，389ページ。

28) マルクス，エンゲルス「共産党宣言」『全集』第4巻475ページ。

29) エンゲルス「『共産党宣言』1888年英語版への註」『全集』第4巻475ページ。

30) マルクス「選挙――金融の雲ゆき悪化―― サザランド公爵夫人と奴隷制度」『全集』第8巻487ページ。

31) マルクス『資本主義生産に先行する諸形態』国民文庫版，47ページ。

32) マルクス「経済学批判」『全集』第13巻19ページ。

33) マルクスは，1868年にマウラーを読んで,「アジア的またはインド的な所有形態がヨーロッパのどこでも端緒をなしている，という僕の主張した見解がここでは（マウラーはこの見解についてはなにも知らないのに）新たな証拠を与えられている(『資本論書簡』(2)，国民文庫版，123ページ）と，エンゲルスに書き送っている。

34) Ю. コスティン「古代アジア的社会について」『アジア的生産様式論争の復活』，234ページ。

35) 「1870年2月17日付クーゲルマンあてのマルクスの手紙」『資本論書簡』(2) 222ページ。

36) 「1868年11月7日付エンゲルスあてのマルクスの手紙」『資本論書簡』(2) 176ページ。

37) 「1873年3月22日付ダニエリソンあてのマルクスの手紙」『資本論書簡』(2) 271-

2ページ。訳文は若干変えてある。

38) Н. Ф. Даниельсон—К. Марксу, 10 (22) мая 1873 г., 《МЭРР》, стр. 288-9.

39) Там же, стр. 296.

40) Маркс, Выписки из книги Герье и Чичерина 《Русский дилетантизм и общинное землевладение》, 《Архив》 XII, стр. 162-3.

41) Там же, стр. 163.

42) *Die Konzepte*, 《Archiv》 Bd. Ⅰ, S. 317,『全集』第19巻386ページ。

43) Ebenda, S. 335, 同上書, 404ページ。

44) Ю. Г. Алексеев, В. И. Ленин о некоторых чертах русской общины конца XIX в., 《В. И. Ленин и проблемы истории》, Л., 1970 стр. 349.

45) 福富正実「再開されたアジア的生産様式論争の経過と若干の問題点について」『アジア的生産様式論争の復活』375ページ。

46) 清水睦夫「北方古代学界の展望(13) ── トリポリエ文化の共同体遺跡」『古代学』第11巻, 松村四郎「古代の東スラヴ人(3)」『天理大学学報』第33号, など。

47) К. Н. Тарновский, Предпосылки возникновения феобализма у восточных славян, 《Вопросы истории》, 1954 No. 4, стр. 87.

48) Там же, стр. 91.

49) Акты социально-экономической истории Северо-Восточной Руси конца XIV-начала XVI в. (以下《АСЭИ》と略), т. Ⅱ, М., 1958, стр. 69, Акты феодального землвладения и хозяйства XIV-XVI в., ч. Ⅰ. М., 1951, стр. 97-8, 200. またチチェーリンは, Акты юридические (СПб. 1838) から豊富な史料を引用している。

50) Л. В. チェレープニン「ロシアにおける封建的所有の基本的発展段階」『封建社会の基本法則』(1960年有斐閣) 351ページ, Goehrke, a. a. O., S. 181.

51) エンゲルス「家族, 私有財産および国家の起源」『全集』第21巻143ページ。

52) たとえば, 野崎直治「ゲルマン古代の村と支配秩序」『社会経済史大系』(1960年弘文堂)Ⅱ,39ページ。

53) 太田秀通「世界史の理論(1)」『世界歴史』(1971年岩波書店) 第30巻204ページ。

54) Kovalevsky, op. cit., p. 74.

55) ibid., p. 78-9.

56) В. П. Петров, Подсечное земледелие, Киев, 1968, стр. 8.

57) Там же, стр. 17.

58) 《АСЭИ》 т. Ⅰ, стр. 41, 183.

59) Л. В. Данилова, Очерки по истории землевладения и хозяйства в Новгородской земле в XIV-XVвв., М., 1955, стр. 331-388. ここに収録さ

れている史料では農戸数が1または2が圧倒的に多い。

60) A. П. Пьянков, Сельская община Северо-Восточной Руси в XIV-XV вв., 《Ежегодник по аграрной истории Восточной Европы 1961 г.》, Рига, 1963, стр. 107.

61) Kovalevsky, op. cit., pp. 94-6, Petpovich, op. cit., p. 217, В. В., Указ. соч., стр. 276-7, Goehrke, a. a. O., SS. 187-188.

62) 鈴木健夫「農奴解放前の北部ロシヤの非領主農民と共同体的土地利用」『早稲田政治経済学雑誌』第228号122ページ。

V 小　括

以上のように，『下書き』は，マルクス自身これを不充分と考えていた痕跡があるし，また現在の研究水準からみても不正確な命題が含まれているように思われる。従って『手紙』と『下書き』とは分けて考察されなければならないし，また厳密なテキスト・クリティークが必要であろう。『手紙』をめぐるさまざまな議論の混乱の原因の1つは，『手紙』と『下書き』の意義と限界，ならびに両者の異質性を明らかにせず，テキストクリティークを行なってこなかったことにあるように思われる。　　(1972年10月31日成稿)